バングラデシュにおける聴覚障害者をめぐる状況とコミュニケーション問題

—農村地域での孤立の克服—

平成 25 年入学
派遣先国：バングラデシュ
山中　奈奈美

キーワード：バングラデシュ，障害者，聴覚障害者，手話

対象とする問題の概要

バングラデシュはアジアの中でも最も貧しい国のひとつである。これまで国際機関や各国政府が，バングラデシュの貧困問題に取り組んできた結果，貧困率は着実に低下してきた。しかしながら，障害者たちはこうした取り組みに反映されにくい存在であり，これまで開発の恩恵を十分に得られてこなかった。バングラデシュの障害者の割合は，国民の約 15～18%と推計が出されているものの，福祉制度は充足しておらず，また，障害者政策は十分に整備されているとはいえない状況にある。その上，先行研究によれば，障害者の中でも特に農村地域に住む聴覚障害者たちは，受動的態度で孤立していると報告されている。福祉の面だけでなく，聴覚障害者が抱える問題の本質は，聞こえないことによって生じるコミュニケーション障害や情報障害といった，二次的，三次的な障害であるため，バングラデシュの聴覚障害者たちが直面している問題は根深いものであると考えられる。

研究目的

本研究の目的は，バングラデシュにおける聴覚障害者が置かれている現状を，主にコミュニケーション問題の観点から明らかにし，特に農村地域に顕著に見られる聴覚障害者の孤立問題とその克服について考察することである。これまで，聴覚障害者に関する研究の主なものであるろう文化研究は，ろう文化にアイデンティティを持ち，自己の聴覚障害を肯定的に捉え，手話を使って会話をする聴覚障害者たちだけのコミュニティに焦点を当て，彼らの暮らしぶりや文化を描くものが多かった。しかし今回は，ろう文化の外側に位置づけられるような農村地域で孤立する聴覚障害者に焦点を当てるために，ろう文化，ろう者のコミュニティのみならず，聴覚障害者と健聴者のコミュニケーションや両者が共存するコミュニティにも着目する。また，ろうコミュニティの場としてのろう学校が，聴覚障害者が属する様々なコミュニティにいかなる影響を与えているかについても調査する。

フィールドワークから得られた知見について

本フィールドワークは，2014 年 6 月 8 日～7 月 13 日の約 1 ヶ月間，都市のダッカと農村地域のラジシャヒの二地域にて，NGO2 団体，ろう学校 6 校，ろう団体 2 団体，民間企業 1 社を訪問し，参与観察と聞き取り調査を行った。聴覚障害者の家庭内コミュニケーション，結婚，就職，ろう学校での社会生活などを調査して明らかになったことのひとつは，ろう学校の福祉的枠組みを超えた存在意義であった。ろう学校に通ったことのない聴覚障害者が，家族との思いや感情の共有に困難を抱えている一方で，ろう学校に通う聴覚障害者は，ろう学校で習得した手話を使って聴覚障害者間で会話が出来るだけでなく，

家族（健聴者）に教えることで，家庭内コミュニケーションを円滑化させている状況が観察された。また，健聴者との結婚が孤立を助長させる一因になっている現状があるが，ろう学校に通う聴覚障害者が一般的に聴覚障害者同士での結婚を望むのに対し，ろう学校に通ったことのない聴覚障害者の中には，自己の障害に対して否定的で，他の聴覚障害者に嫌悪感を抱く者もいた。そしてまた，現在大企業でグラフィックデザイナーとして働く 29 歳男性の B さんは，現在バングラデシュに 1 校しかない，中学校卒業資格が取れるろう学校を卒業したことで，普通学級の高校への進学を果たし，コンピューターデザインを学んで，現職へと繋がった。以上から，ろう学校は，ろう者のコミュニティだけではなく，聴覚障害者と健聴者が共存する複合的なコミュニティの構築に貢献していることが明らかとなった。ろう学校が持つ存在意義は，福祉的枠組みを超え，言語の獲得にとどまらず，アイデンティティの獲得，人間らしい暮らしと営み，コミュニケーションの円滑化，結婚，就職など多岐に及んでいた。社会福祉が不十分なバングラデシュ社会では，ろう学校はより大きな意味をなしていると考えられる。

写真：政府系ろう学校の外観（左），非政府系ろう学校の授業風景（右上），NGO のろう学校の授業風景（右下）（ラジシャヒにて）

写真：政府系ろう学校の校庭（左）と生徒（右上），NGO のろう学校の授業風景（右下）（ダッカにて）

写真：デザイン編集を行っているBさん（左），Bさんがデザインした石鹸の看板広告（右上）と石鹸のパッケージ（右下）（ダッカにて）

今後の展開・反省点

今回の調査での反省点は，前回訪問した際に聞き取り調査をした内容と大きく異なった質問をすることが出来なかったことである。目的に挙げていた事項が抽象的すぎたため，具体的な調査手法や聞き取り調査項目まで落とし込んでいなかった。渡航前の事前準備がフィールドワーク中の質を大きく左右すると痛感し，今後の渡航では入念な準備を心がけたい。今後の展開としては，目下はフィールドワークで得た情報が事実に基づいたデータが多く，客観性に欠けるため，今回のフィールドワークデータがより活きるようにするためにも，数値的な指標などの客観的データの収集に努めたい。大きな展望としては，バングラデシュ社会が国家主導の福祉制度に頼らず，人びとのつながりによって自主的な互助の実践が成立している社会であるということを肯定的に捉えて，喜捨や富の分配といった南アジア的要素も考察しつつ，福祉概念の再検討を行って行きたいと考えている。

写真：聴覚障害者がホームサインで従姉妹と会話する様子（左），ろう団体の聴覚障害者たちのローカルサインでおしゃべりする様子（右）（ラジシャヒにて）

※ホームサイン…家庭内で自然発生的に生まれるサイン
※ローカルサイン…ある一定の地域で複数の聴覚障害者間で共有され使われるサイン